

愛知・大渕遺跡

おおぶち



(名古屋北部)

- 1 所在地 愛知県海部郡甚目寺町
- 2 調査期間 一九八五年(昭60)四月～一九八六年三月
- 3 発掘機関 財愛知県埋蔵文化財センター
- 4 調査担当者 梅村清春・宮腰健司・中野良法
- 5 遺跡の種類 集落跡
- 6 遺跡の年代 弥生時代～鎌倉時代
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

遺跡は濃尾平野の南西に位置し、海拔○～一mの低湿地部に東西にのびる砂堆上に立地している。時期は、弥生時代・古墳時代後期～平安時代・鎌倉時代の四期にわかれ。その中でも、

平安時代が遺跡の最盛期で、甚目寺を中心とした村や街道が周辺に広く展開していたものと思われる。

発掘調査は、名古屋環状二号線の建設に伴い、一九八三年から八五年の三ヵ年

の間、継続して行われた。木簡は、一九八五年に実施した調査区・60K区で、北西から南東に走る幅約一・八m、深さ約〇・六mの平安時代(九世紀前半)の溝SD〇二上層より出土した。同時代の遺構としては、掘立柱建物・井戸があり、建物の方位などからみて、八～一〇世紀の間に数回の造り替えが行われたと考えられる。SD〇二は、遺跡の西側と南側に、建物の軸線にほぼ沿うようにして走る数条の溝のうちの一本で、集落の南限を画するものである。遺物は、土器では土師器(甕・瓶・鍋)・土錘・須恵器・灰釉陶器があり、木器では井戸杵・曲物・下駄が出土している。なお、今回出土した木簡は、古代に遡るものとしては県内で最初の事例となる。

8 木簡の釈文・内容

(1) □物〔部力〕

(225)×(18)×(6) 081

木簡は、上下が折れ、左右も荒く割ったままで、裏面も剝離したままになっている。全体に墨痕は薄い。

釈文に関しては、奈良国立文化財研究所飛鳥藤原宮跡発掘調査部加藤優氏の御指導を得た。記して感謝したい。

9 関係文献

財愛知県埋蔵文化財センター『年報 昭和六〇年度』(一九八六年)

(宮腰健司)